

社会教育40年大学開放20年・断章

—公民館主事としての旅立ち—

安 原 昇

社会教育への私の関心は、1958年（昭和33年）に広島大学で初めて実施された社会教育主事講習を受講したことで鮮明となる。当時、大学4年生であった私たちが社会教育・公民館第一世代の現場人に互して受講する中で、社会教育実践が醸し出す自己学習・相互学習の臨場体験は、私を教育的歓喜で魅了したものである。1959年（昭和34年）11月、私は社会教育主事兼公民館主事となる。

公民館職員としての私たちの世代は、第二世代に属する。「公民館人」を自認し、戦後の新時代を公民館によって開拓しようとした第一世代に続く私たちは、戦後の教育学部等において社会教育を学び、その活路を地域の学校外教育に求めようとした世代である。しかし、そのような道がすでに拓かれていたわけではない。

朱膳寺春三は、公民館「人」について次のように述べている。「はじめ公民館は、農村を基盤として構想された。この意味からすれば、中央あるいは都市的性格に対比されていたと、いってもよい。したがって、公民館「人」とは、幕末における『草そう』（草むら転じて在野民間の意）という言葉に、何か通じるものがある。・・・自己を在野にある人と意識して、しかも、政治的に発言しようとした時に、使われた言葉である。・・・創設期の公民館関係者は、まさに官僚体制からはみだした『民間にある人』であった。公民館の創設期は『世直し』の時代であった。公民館運動といった、地域的な運動にかかわる公民館「人」の中には、政治的発言が多かったことも確かであった。その反面、論理的な裏付けよりも、直情径行的な側面は否定できない。」（『公民館の原点』1985年）

学卒後、県教育委員会の社会教育主事任用がままならぬとして待機の間、県課長の薦めもあり、私は県教育委員会主催の公民館職員講習第一部と第二部を現場の先輩公民館職員に互して受講した。その記録は記念写真にしかないが、参加者の活力と楽しさのイメージは今も残っている。まさに第一世代の生きざまを眼前に見ていたのである。教師のための教育実習とは異質な教育世界の体験であった。特に、新制中学・高校で生徒会長、大学で学友会執行委員長などを経験していた私には、在野的な政治の風情が魅力的に感じられたのかも知れない。第一世代には地域の青年団活動経験者が多いが、第二世代はそれを学内で疑似体験していたことになる。

その後、大学の恩師と県行政の課長と公民館長（町教育長）、さらに我が政治生命をかけて公民館を建設した県公民館連合会長（前町長）等の配意によって私は公民館主事となる。同様に社会教育の道をあゆみはじめた同級生も複数を数えた。私たちの地方公務員としての出発は、遅れてきた青年であるばかりでなく、その志において草創期の第一世代と決定的に異なる。第一世代は生活の糧を他で補いながら、公民館そのものの創建とそれによる地域復興をめざしたが、第二世代の前に公民館はすでにあり、その継承と発展が課題となる。今日まで続く公民館同人クラブ「茶の間会」などで遭遇する第一世代のたくましさに

は、あらためて瞠目することが多い。

今にして回想するのは、若い社会教育専攻者を受け入れようとする当時の公民館関係者の熱意である。その時代背景としては、社会教育法の大改正により「公民館の主事」が明記され、新しい公民館主事らによる公民館と地域振興への期待感があったと思う。公民館は地域によって支えられるとともに、公民館は地域を興し支える。その連帯の土壌が別名公民館法とも呼ばれた社会教育法の本質であった。

1959年11月8日、公民館主事に着任した私は、「月刊社会教育」誌1960年1月号の〈ひろば〉に、『公民館主事1週間目』と題する短文を寄稿している。「この1週間に、理論と実際の谷間に立つ自分を見出し、地域住民の欲求を率直にとり上げ、それを理論的に技術化していくこと、若さを生かし、足で集めて、頭で組み立てる、心身両面の地道な努力、このごく常識的な積み重ねが大切だと痛感する。」

全く文意を尽くしていないが、要するに理論と実践のかかわり方が問題意識の中心にあった。第二世代の宿命は、ようやくにして形成されつつあった社会教育理論ないし公民館論の学習とそこからの出発でなければならなかったことである。しかし、私たちの未熟さは大学で学んだ理論を現場実践の指標として先導させようとしたことである。第一世代は実践そのものに沈潜しそこから学ぼうとしてきたが、第二世代は理論と実践を峻別し対比しがちである。そして理論を実践の上におこうとする誤謬に当時の私はまだ気づいていなかった。ある年の県公民館大会に、私は百余冊の社会教育や公民館の専門書を展示し、参会者に本を読もうと呼びかけたものだ。その後も実践者は常に書籍等の理論から学び、自己を客観視し得るもう一人の自分を育てることと実践者相互の見学や交流による他流試合の必要性を主張してきた。いまだ理論信仰から脱皮できていないのかも知れない。しかし、公民館実践の場を離れ、概論書と実践事例集の氾濫する現在では、選書の必要を痛感する。特に、公民館そのものを志向してきた第一、第二世代と異なり、公民館を通過職域集団とみなす者の多い今日の第三世代のために、公民館の魂を伝授する古典の提示が必要である。

その後、5年目を迎えた私は、1964年1月に、『公民館主事の専門性—学習と組織化のために—』と題する20ページばかりの小冊子を広島社会教育理論サークル会員の現場人に配布している。「広島社会教育理論サークル」は、私たち若手同人が広島市周辺の社会教育職員に呼びかけた学習会であるが、その名の通り理論志向性の強い問題提起と徹底討論のひろばであった。（小冊子やサークルの概要は当時の「社会教育」誌に紹介された。）その当時から私の胸中にある思いは、公民館を中心とする社会教育が学校から自立することとその独自性の確保にある。しかし、今日の学校を準拠集団とする嘱託館長や脱社会教育・超社会教育の生涯学習を信奉する職員に、「学校からの自立なくして連携なし」と説くことも難しくなっている。

その小冊子の中で、当時の諸論文に学びながら〈主事の専門性研究の基本的視点〉を次のように要約した。

- ①主事の専門性を問題にし、専門職としての確立を目指すとき、専門職そのものの吟味の必要性
- ②専門性の問題を「社会教育とは何か」の本質論をめぐっては議論できない
- ③主事の専門性の問題は、その指導者としてのあり方、指導助言のあり方に深くかかわっている
- ④社会変貌の中、社会教育施設としての公民館の性格と機能の歴史的再検討の必要性
- ⑤教育制度の比較研究の必要性
- ⑥教育行政の科学化と行政の意志決定過程における専門性の重視

⑦社会教育主事の資格規定との対比における公民館主事の実践と思想の問題

⑧行政による「上からの研修」とわれわれ「下からの自由な研修」の問題

⑨「社会教育における実践者と研究者はさらに深く結びつかなければならない。実践者の理論に対する無関心や無能力、また研究者の現場軽視、研究の経験科学としてのひ弱さは双方から克服されなければならない。研修という名における一方的な理論の切り売りだけでなく、フィールドワーク、ビジテーション、セミナーなどを通じての相互理解と研究が望まれる。実践者の立場からこの任務を遂行し得るのはさしあたって若い主事のように観察される。」

最後の「研究者と実践者」を巡る問題で、当時の私を鼓舞してくれたのは、「思想の科学」誌1959年1月号の桑原武夫のエッセー『研究者と実践者』であった。その一部を再録してみよう。

「実践者の世界はつねに明るい。社会がどんなに暗くなっても、彼は明るい。それは認識不足ということだろうか。彼は実践しなければならないが、そのためには自分の働く世界が見えていなければならない。だから暗くても明るい。それでは主観主義ではなからうか。主観的なキメコミで夜道があるけばすぐひっくりかえる。それでは実践者ではない。夜道もあるきなれば見えてくることもあるが、懐中電灯というものもある。ともかく工夫をこらして見て、動く。だから明るいのである。本当に暗い世界を明るくしたい、と思う人なら、暗い夜も道をすすむだろう。また、実践ということは思索ではなく行動だから、必ず対象との相互作用となり、主体も何ほどかの変化をうける。そして通れないところがあれば、わきから回るという意味での現実との妥協は不可避である。それを不純というのは、きわめて言いやすいことである。それよりも、変化をうけながら、回りみちしながら、しかも究極において自分の理論の本筋はかわらず、やはり同じ道にあるいていたという人の高次の純粋さを認めることの方がむづかしいのである。」

「経験科学とくに社会に関する科学における理論は、現実の人生、社会に対応し、しかも一おうの距離を保つことによって、これを正確に見とおし、これの指標となるべきものである以上、それを作り出す人は現実の人生、社会での実践経験をもたねばならないはずである。」

「本当に理論をもつとは、他の理論をもかえりみ、かみしめつつ、現実の中から自分で苦心して作り上げたものを身につけることであろう。」

「現実にあふれて、そこから発想し、たとえばはじめは素朴でも、理論を自分で築き上げてゆく努力をする型の研究者が少なすぎる、・・・」

「知的にも行動的にも、人間世界に新しいことはつねに何ほどかの危険を伴うが、冒険の精神を忘れては何の進歩もないであろう。」

桑原自身も「実践者を理想型において描きすぎたようだ」とのべているほどの文章であるが、私は実践者の立場から研究者とのかかわり方や理論と実践との統合のあり方に一縷の光明を見出したような思いに駆られたものである。

その体験の場は、やがて全国公民館連合会によって与えられることになった。1964年から4カ年にわたり、「公民館のあるべき姿と今日的指標」の成案作成とその解説書の刊行を行った専門委員会にかかわり得たことである。その人選に批判があるとしても東西の研究者と行政担当者を委員とし、公民館職員を幹事とする構成は理論と実践の統合、実践の理論的構築をめざす最適の場のように最年少の私には思われた。その特色は、委員の中に、多くの指導書を生み出してきた文部省関係者が含まれなかったこと、独創的・革新的な「三多摩テーゼ」に示された公民館論との結合がその後の第二次専門委員会以降に計られたこと

である。三者三様の公民館論は、公民館の構造化の視点で共通している。それは公民館に対する時代の位相、すなわち学習者の多様化や学習内容の高度化、学習方法の多彩化などが構造化を要請したのである。ちなみに、国立社会教育研修所で私が編集した第一教材は「公民館事業の種類とその構造」であった。前後して提起された徳永功の三階建公民館論「公民館活動の可能性と限界」、中島俊教の三層事業論「これからの公民館」と全公連の三機能論「あるべき姿」の比較研究は、今日でももっとも興味深い実践的公民館論のテーマである。

公民館勤務当時の私は、比較的自在な職務に満足し、3年、5年と同一職場に留まることに執着しながら、反面そのことがもたらす公民館活動のマンネリ化への自己責任に気が付き始めていた。公民館に生涯長く関わりたいという直線的意思の芽生えとともに公務サイクルの客観性とどう調和させるかは、いわゆる「公民館人」にとって重要な課題であった。

私は、地方公務員としての公立公民館主事の職務特性を次のように整理したことがある。

1. 広く公務の内外にひろがる「教育」に公務として関与するものである。
2. 公務の質から言えば、国民または住民への「奉仕」の色彩の強いものである。
3. 公務の量から言えば、「恒常的」「継続的」なものである。
4. 公務の層から言えば、「高度の知識や技術」を必要とするものである。

1の教育を公務として行うには、教育ないし社会教育・生涯学習についての本質的理解を必要とする。2の奉仕者としては、国民全体に、市町村で直接的に、学習者への支援者として、とりわけ学習遅滞者への援助者としての働きが求められる。3の恒常的特性は公民館が社会教育施設であることに由来しその開放性が求められる。4の専門性をめぐる諸問題は、職制の確立と職務遂行の自律性にある。

公民館実践者・理解者としての私は、以上のような場と機会に学びながら、理論におもねることなく公民館世界に没入できるようになったと思う。国の行う公民館職員研修にかかわりながら、若い新任職員のための公民館入門を1976年6月号の「月刊公民館」に寄せた。公民館の歴史的理解の必要性和現代公民館の使命や職員のあり方を述べたものである。最後に「あなたにとって、公民館との出会いはいま偶然にすぎないかもしれない。しかし、公民館と正面から向き合い、住民とともに現在に生きるなら、いつしか必然と思う日がくるであろう。それは、公民館とともに成長した自分を発見できるからである。」と問いかけている。それは同時に、公民館との共生の道は自分にとっても必然の道であったと納得したかったのである。

公民館職員の第二世代に課せられた今ひとつの命題、先にふれた学校からの自立の問題は、その後大学開放にかかわるようになってからも念頭を離れなかった。今日では、皇至道の後期教育学に学びながら、楕円型地域教育論として納得しようとしている。

我が国の社会教育では、欧米の成人・継続教育に比較して、従前から学校補完的な青少年の学校外活動は成人教育と並立する二大領域であり、その一翼を担う公民館も時代の要請に応じた対応を行ってきた。遠くは農村青年の演劇活動、農家の二三男対策、中学校卒業生向け社会人教育、子どもの遊び場確保、留守家庭児童会等々である。

より根元的に、学校教育と学校外活動（社会教育としての）をめぐる問題は、学校の成立と共に発生し、また学校の補完的役割から出発した我が国の社会教育の本質と自立性を問う課題として、以前から論じら

れてきた。明治末期の「学校中心自治民育」、第一次大戦後の「学校中心社会教育」、昭和期に入つての「全村学校」運動などは、学校を中心とし、社会教育をその周辺に位置づける民衆教化論であつた。太平洋戦争後の「コミュニティ・スクール」運動や昭和五十年代以降に再導入が試みられた「コミュニティ教育」論の多くも学校を中軸とする点で、相似している。

これからの地域教育形態は、これまでの学校を円の中心としその周辺に社会教育や家庭教育を配する学校中心円型教育形態から、学校と公民館を二つの焦点とする楕円型教育形態へと転換しなければならない。今日の生涯学習ネットワーク論の中で公民館が相対化され、地域計画の周辺に位置づけられることの多いのは遺憾なことである。

国立社会教育研修所（現在の国立教育会館社会教育研修所）時代に関して、ただ一つ記すとすれば、文献二次情報の在り方についてである。社会教育文献の収集と目録作成に関心を持っていた私は、公私とも機会あるごとにそれを試みようとした。広島大学教育経営学石堂研究室が編集した『社会教育関係文献目録』（1972年）の系譜を継承しようとしたのかもしれない。今日では、当時作成した分類体系に基づく社会教育・生涯学習に関する文献目録をはじめ各種の目録が作成されるようになっているが、なお書名や雑誌名に依存したタイトル主義である。これからは、キーワードによる内容検索が可能な文献目録の作成が痛感される。

大学開放の在り方については、日本教育学会や社会教育学会、「文部時報」や生涯学習フェスティバルなどの機会を得て発表してきた。公開講座を中心とした啓蒙期の大学開放は、実践を通じて大学を地域社会に「開放」し、大学自らも「解放」されるしか道はない。

私の地域理解と市民・教育関係者との相互学習に有益だったことの一つは、高松市教育文化研究所生涯学習部会における共同調査研究である。

- 1984年 『市民の学習活動の実態・学習ニーズに関する調査研究』
- 1985年 『公民館事業に関する調査研究』
- 1986年 『民間団体活動に関する事例研究』
- 1987年 『市民学校受講生の学習意識に関する調査研究』
『学校開放の在り方に関する調査研究』
- 1988年 『高松市における学校開放制度の利用に関する調査』
- 1989年 『教員を退職された方のキャリア開発とその活用に関する調査』
- 1990年 『高齢化社会における社会参加のあり方と学習プログラムの研究』
- 1991年 『熟年者の高齢期へのソフトランディングを意図した学習生活についてのプログラムの研究』
- 1992年 『企業関係者の生涯学習についての意識と実践に関する調査研究』
- 1993年 『生涯学習に関する学校教育活動と教職員の意識についての調査研究』
- 1994年 『学びとふれあいのある生涯学習社会の創造を目指して』
- 1995年 『同上 II』
- 1996年 『同上 III』
- 1997年 『「生きる力」をはぐくむ学校・家庭・地域社会の連携の在り方』（中間報告）
- 1998年 『同上』

自己教育史的略歴



昭和10年 兵庫県篠山町に生まれる。

昭和30－34年 広島大学教育学部教育学科において、皇至道「現代教育学」の楢円型地域教育、石堂豊「現代社会教育の課題」の五つの基本的課題などを学ぶ。

昭和34－44年 広島県安芸郡矢野町（現広島市）教育委員会社会教育主事として矢野公民館に勤務。その間、広島県公民館連絡協議会の主事部会や「広島社会教育理論サークル」の世話人を務める。全国公民館連合会専門委員会の「公民館のあるべき姿と今日的指標」作成に幹事として参画、宇佐川満『社会教育原論』に学ぶ。昭和41年に文部省社会教育指導者海外視察団の一員として欧米8カ国を訪問。

昭和44－53年 国立社会教育研修所に専門職員として勤務。その間、研修担当の傍ら「社会教育」誌、「月刊公民館」誌の編集に参加、社会教育文献の収集と目録作成に努む。昭和46年度総理府第5回青年の船にリーダー養成担当教官として乗船し、東南アジア6カ国を訪問。昭和48年『青少年指導者入門』、昭和52年『公民館経営ハンドブック』の編集・執筆、昭和52年『社会教育』、昭和53年『学校と地域の青少年指導』に分担執筆。中島俊教『これからの公民館』に学ぶ。

昭和53－平成11年 香川大学大学教育開放センター及び生涯学習教育研究センターに助教授・教授として勤務。その間、四国地区社会教育主事講習講師や教育学部の社会教育主事資格関係科目を担当。昭和56年『社会教育学』、平成元年『現代公民館全書』に分担執筆。日本社会教育学会理事、香川県、高松市、丸亀市、倉敷市等の社会教育・生涯学習関係委員、平成11年高松市市政功労者表彰。荷風、夢二の世界に遊ぶ。

現住所 岡山市東畦145－41－706